

學界消息

ソ連邦科學アカデミーにおける
移行期經濟の討論會

藤田 整

資本主義、社會主義、共產主義とは、社會の一連の發展段階をとらえるカテゴリーである。マルクスが、人類社會の資本主義にいたる發展過程を分析して豫見したところによると、資本主義をアウフヘーベンした社會主義の社會は、生産手段の共有のうえに建設され、そこにおける労働は、生産物の媒介によることなく、直接に社會的總労働の構成部分となり、個々の生産者は、かれが社會にあたえた労働量に比例して社會から生産物をうけとることになる。社會がさらに發展し、分業のもとでの個々人の奴隸的從屬と、精神労働と肉體労働の對立とがきえざり、人間の全面的開花とともに、生産力が飛躍的に發展して社會の富がみちあふれるようになれば、《その必要におうじてうけとる》共產主義の社會に到達するとされてきた。

さて一九五八年七月、ソ連邦科學アカデミー社會科學部門において、『共產主義建設の理論的諸問題』というテーマのもとに學會がひらかれ、九人の長老學者たちが報告したのち、二十六人が討論に参加した。そこでとりあげられた諸問題を分類する

と、一—所有關係の問題、二—商品・貨幣・價值概念にかんずる問題、三—農業問題、四—労働問題、五—民族問題、六—對外問題、七—社會主義的生産關係の規定にかんずる問題、八—その他の問題、というようになるが、二については、まえに筆者が検討した諸見解と要點においておなじであるからここでは省略することにし、また四—労働問題(ノルマの改善、労働者の文化と技術の向上、精神労働と肉體労働との差の問題、ほか)、五—民族問題(各民族共和國の特殊性と一般性、ほか)、六—對外問題(資本主義との經濟競争、ほか)、八—その他(イデオロギー、法律、文學、技術、ほか)については、問題があまりに多岐にわたるからこれまた割愛することとし、ここではさしあたり、一、三、七の問題のみをとりあげよう。なお以下に『經濟的諸問題』一九五八年第九號に發表された報告者と討論参加者、およびその發言内容を項目別に一覽表にしてかかげる(一部の發言は印刷されていない)。

* この分類には、區分肢の抽象度が二つあって未整理といえるが、ここではこのほうが、問題への多面的アプローチのうえからは便利である。

* * 拙稿「ソヴェト社會主義社會における價值概念」『一橋論叢』一九五八年二月號、九一—九五頁。なおその論文の九四頁上段一行目、「第三の『所有の二形態間の商品・貨幣關係』とあるのは書きまちがいで、『第一の『國家セクター内の諸企業間の商品・貨幣關係』とすべきであった。——この論文以後かんがえたのでは、社會主義段階に

	掲載頁	1	2	3	4	5	6	7	8
		所有關係の問題	商品・價值概念	農業問題	労働問題	民族問題	對外問題	生産關係の規定	その他の問題
報 告 者	オストロヴィチヤノフ K.B.	85-8, 116-8	/	/	/	/	/	/	
	ミーチン M. B.	88-9							意識
	フェドセーエフ П. Н.	90-2, 116	/	/					法律
	ロマシキン П. С.	92-3, 115							
	ラブチュフ И. Д.	93-6, 115-6	/	/					
	ガトフスキー Л. М.	96-100		/					
	アルズマニヤン А. А.	100-102					/		
	ガフーロヴァ Б. Г.	102					/		
討 論 参 加 者	シチュルピヌイ Д. Р.	102							文學
	ベルシン П. Н.	102-3	/	/					技術
	ハチャトツロフ Т. С.	103							
	ネムチーノフ В. С.	103-4		/					
	クロンロード Я. А.	104-5					/		
	メシカウカス К. А.	105-6					/		
	クシベコフ Д.	106	/	/					
	ジャチュンコ В. П.	106-8		/					
	ブルデンスキー Г. А.	108-9				/			
	コヴァレフスキー Г. Т.	109-10	/	/					
	アボルチン В. Я.	110					/		
	アミーノフ	110-11					/		
スチュパニヤン Ц. А.	111-2		/			/			
ソーニン М. Я.	112-3				/				
バシコフ А. И.	113-4					/			
ツァゴロフ Н. А.	114-5	/							

資料: 《Вопросы экономики》 No. 9, 1958, стр. 84-118.

おける平均労働
 時間による労働
 支出計算にひき
 つづき、共産主
 義段階において
 は、ナマの時間
 による労働支出
 計算の可能性が
 うまれるのであ
 り、その根拠は、
 兩段階における
 生産力水準の差
 にもとづく分配
 原則のちがいに
 ある。しかし、
 わしくは、モノ
 グラフをかき必
 要がある。
 とところで一九五〇
 年にも、科學アカデ
 ミー經濟研究所にお
 いて、『社會主義よ
 り共産主義への漸次
 的移行の道』という

テーマで學會がひらかれている。しかしこの學會の成果は、一九五二年のスターリン論文、およびその後のいろいろの勞作をつうじて發展させられているから、學說史的にはともかく、ここであらためて理論的にそれをとりあげる必要はないであろう。ただその學會では、いつから、またどのようにして生産物の分配がタダになるかというような分配面の問題に過度の力點がおかれていた。分配は生産の結果でのみありうるから、同種のテーマをあつかいつつも、こんどの學會のほうが、はるかに地道な問題提起をしているといえる。

《所有關係について》この小論のはじめにかかげた『ゴータ綱領批判』の引用からもわかるように、マルクス主義の古典においてとくに經濟の面にかぎっていえば、周知のように、社會主義と共產主義とをわけるとする基準は、集中的には兩社會における消費財の分配原則のちがいにあった。ところがソ連における社會主義經濟の建設が、國家的所有とコルホーズ的所有という二つの所有形態をふくむものとして現實化されはじめて以來、スターリンをもふくむ一連の論者たちは、二つの所有形態から全人民的所有形態への統一が、なにか共產主義への到達を意味するものでもあるかのようにとなえはじめた。たとえばスターリンは一九五二年論文において、「國家的セクターとコルホーズ的セクターにかわって……一つの生産セクターがあらわれるときには、商品流通は……消滅するだろう」とし、また「商品生産の消滅とともに、價值および……價值法則は消滅するだろう。共產主義社會……では、生産物の生産についてやされた勞働量

は、商品生産のもとのように……價值の諸形態を媒介としてでなく、直接に……時間量によつてはかられるだろう」とした。かれは、商品生産および價值法則の消滅した社會主義階段というものを考へてはいないようだから（すくなくとも、このような重要問題について、それが「ある」という言明をしていない）、以上の論旨をまとめると、生産セクターの統一→商品生産（流通）の消滅→價值法則の消滅→共產主義、という論理によつて、スターリンは、單一の生産セクターの出現、いいかえると單一の所有形態の出現を、共產主義社會への到達であるとしていたと主張できよう。

このようにして現在、社會主義、共產主義というカテゴリーのつかいかたに混亂がおこっている。しかし、個別的な事態にもとづく便宜的用語法と、マルクスによる體制區分の一般理論とをとりかえる必要はないから、このさい、共產主義というカテゴリーのスターリン流のつかいかたはやめるべきであろう。ところでこの點については、中國における見解のほうが古典に忠實だ（もちろんここで古典にこだわるのは、古典における考へかたが、この點については現在でも有効とおもうからである）。たとえば一九五八年一月に採擇された中國共產黨中央委員會の人民公社にかんする決議のなかでは、「社會主義的集團所有制から社會主義的人民所有制への轉化は、社會主義から共產主義への轉化とおなじことではない」と明記され、「社會主義社會と共產主義社會とは、經濟上の發展段階がことなる二つの段階である」というばあいには、その區別の基準として、周知

の分配原則をあげているのである。⁽⁵⁾とはいえ、さきの所有形態の統一を共産主義への到達とする用語法が、げんにソ連においてかなり有力である以上、ソヴェトの文献をよむばあいには、そこにおける共産主義というカテゴリーのつかいかたによく注意する必要がある。

さて、現在ソヴェト経済に存在する二つの所有形態が全人民的なそれに統一されるということは、ソヴェト経済における商品生産の最終的消滅を意味する。したがって、どのようにしてこの段階に到達するかという問題のうちに、現段階におけるソヴェト経済の主要な問題が集中的に表現されているといえる。そこでテーマの學會においては、ベ・フェドセエフ(アカデミー通信會員)が、「移行期における生産關係の發展の諸問題について」という報告のなかで、所有關係にさうとうな比重をおきつつ、まず「國家的、社會主義的所有と、未來の共産主義的で國家のない所有形態とのあいだには、根本的相違はない」とした。ついでかれは、最近における個々のコルホーズの經濟力の強化、またインター・コルホーズ企業および施設(複數のコルホーズが共同で所有する企業や施設—筆者)の發展にふれたのち、現在のコルホーズ的所有の特徴についてつぎのようにのべた。「コルホーズ的所有は、共産主義建設の現段階において、重大な變革をうけている。……コルホーズ的所有は、二者一體的内容(двуединое содержание)つまり集團的所有と全人民的所有的要素とをふくむ。したがって集團的所有の概念は、現段階におけるコルホーズ的所有の性格を完全には表現

していない。コルホーズ的所有における全人民的要素の漸次的増大とは、コルホーズ的所有が、ますます協同組合・コルホーズ的所有の性格をうしない、遂にはまったくうしななって、内容においても形態においても、完全に全人民的所有に轉化する、ということにきずる⁽⁶⁾」とした。

つぎに、イ・ラブチエフ(農業アカデミー會員)は、「コルホーズ制度の發展と、國家的および協同組合的所有の相互關係」という報告において、コルホーズ的所有の特徴と、その發展方向について、つぎのようにのべた。「……コルホーズ的所有が集團的所有であるという命題もただしくない。それはコルホーズ的所有の本質を完全には表現していない。たしかに生産物にたいするコルホーズ的所有が、個々のコルホーズ……の集團的所有であるというのはただしい。ところが不可分フォンドについては、それはよりひろい社會・經濟的意義をもち、そのことは、コルホーズ的所有を集團的所有として特徴づけるときには無視されている。

* コルホーズの不可分フォンドとは、コルホーズ員個人には分配をゆるされないコルホーズ全體の生産面および文化・厚生面の資産である。具體的には、コルホーズの農具と家畜、倉庫、運搬具、土地改良・水利施設、事務室、學校、病院などの現物、および資金である。См. «Краткий экономический словарь» 1958, стр. 192.

「……コルホーズによる生産手段の所有がどういう形態に發展するかという問題は、おおきい……意味をもっている。ところ

でコルホーズ的所有は國家的所有には成長しえない。これは協同組合の國家化(Организационная)を意味するだろうし、これには黨もレーニンもつねに反對していた。コルホーズ的所有の全人民的所有の水準への上昇とは、単一の共產主義的所有への移行過程において、それが全人民的所有の特殊な變種に成長することを意味する」とむすんだ。

討論に参加したエヌ・ツァゴロフ(經濟學博士)は、以上の二人とはちがって、よりオーソドクスな見地にたつて概念を整理した。すなわち「……二つの階級が存在が、社會主義的發展の全過程に必然であるとは、誰によつてもしめされなかつた。社會主義段階と共產主義段階との區別は、分配原則の相違のうちにもっともはっきりと表現されている。……」

* ツァゴロフは學說史にくわしい。一九五六年には、『農奴制崩壊期のロシア經濟思想概観』という四六一頁の著書
を出版したし、また一橋大學經濟研究所編の『經濟研究』

一九五八年一〇月號「ケネー」經濟表」公刊二〇〇年記念特集」にも寄稿している。

「共產主義のよりひくい段階と、よりたかい段階との區別を特徴づける勞働におうじた分配という社會主義の原則は、所有の二形態からはでてこない。所有の二形態の融合そのものは、勞働におうじた分配という社會主義の原則と、必要におうじた分配という共產主義の原則との交替を意味しない」とのべた。はたせるかな、ツァゴロフの見解にはさっそく反論がとびだした。まずさきのラブチェフの批判はまことに高壓的で、「社

會主義社會における所有の二形態と二階級の存在にかんする問題は、マルクス主義科學にとつてはとくに解決されておらず、これについて討論する必要はない」とした。つぎにカ・オストロヴィチヤノフ(アカデミー會員)によると、「ツァゴロフは、まったく根據なく、なんらの論證もなしに、まずはじめに、都市と農村のあいだの差別、ついで精神勞働と肉體勞働のあいだの差別……が除去されねばならないと主張した。このような問題提起はただしくない。というのはその支持者は、共產主義の二段階をわける基本的指標を、生産の分野ではなく、消費の分野にみているからである」とした。しかしツァゴロフが分配原則のちがいをいうばあいには、とうぜん生産力増大の結果としてのそれを述べているのであり、こうなると、オストロヴィチヤノフたちは、ツァゴロフ批判のまえに、まず『ゴータ綱領批判』の批判」&でもいうべきものを書く必要があるのではなかろうか。

このツァゴロフをめぐる論争は、さきに指摘しておいた段階區分をめぐる用語法の混亂によつていっそう混線したのであるが、それはさておき、所有關係について論者たちのいわんとするところは案外一致している。それはかれらが、コルホーズ的所有形態の發展過程を、不可分フォンドの量的、質的向上をつうじてのその全人民的所有形態への接近という方向に、みようとしていたということである。つまりこのばあいには、「現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定的理解……をもふくむ」というみかたが有効である。またこれを一九

五二年のスターリン論文における見地とくらべると、かれが、コルホーズ的所有形態の全人民的なそれへの発展のみちを、コルホーズ生産物の商品流通からの排除、その國營企業生産物との現物交換というような生産の果實の面において、⁽¹⁴⁾みていたのにたいし、こんどの討論會は、コルホーズの基本的生産手段の全人民的所有への成長というような生産の基礎に注目している點に、おおきいちがいがあり、また進歩があるとおもう。

《農業問題について》以上のように、所有關係の問題とは、つまりソヴエト農業の工業にくらべての後進性よりおこる問題のことであった。そこでつきに、さきの問題の背後にあるものより具體的にとりあげよう。

フェドセーエフは、さきの報告において、都市と農村の關係、人口の適正配置、その他について、つぎのようにのべた。最近における「生産の協同化形態の變化および工業管理の再組織は、社會主義社會の生産力と生産關係の發展が、こんにち存在する大都市の擴張の必要とは、まったく無關係なことをしめしている。社會主義的生產關係および管理形態のいっそうの完成によって、人口の合理的分散のために必要な條件がつけられるだろう。……そして大都市における大人口のきゅうくつさ、および農村の未開發はとも過去のものとなるであろう。各種の高速運輸機關、ラジオ、テレビ、映畫が大々的に發達すれば、さいはての地の住民たちも、大都市に集中している文化と科學の諸成果にかかづきうる。他方、社會主義農業の發展にかんするあたらしい資料は、農村の過去の後進性克服のための諸條件

が、ますます急速につくられつつあることをかたっている。農業労働が工業労働に、農村住民の文化・厚生的條件が都市住民のそれにあたえまなく接近すること、これが社會主義農村の發展の道である⁽¹⁵⁾とした。ラブチエフもまた、このフェドセーエフの見解とほぼおなじことをのべた⁽¹⁶⁾が、われわれは、これらの發言のなかに、現實的で具體的なあすの社會の青寫眞をみとめるのである。

《社會主義的生產關係の規定について》ヤ・クロンロッド(經濟學博士)は、討論において、社會主義經濟における矛盾の問題との關連において社會主義的生產關係の規定の問題をとりあげ、「社會主義的生產關係とは、搾取から解放された人々の同志的協力と相互扶助の關係であるとする……規定を批判した。この規定は……生産關係の根本的な特徴づけ、すなわち所有の性格と、それによって制約されている……生産物の取得關係の性格とをふくんでいない⁽¹⁷⁾とした。このような理由によって、クロンロッドはこの規定を科學的なものとみとめず、かわりに以下のような定義を提案した。すなわち「社會主義的生產關係とは、物質的生產と交換における人間のあいだの關係であり、その基礎は、生産手段の社會的所有、労働におうじた分配、および労働者のみによる剰餘生産物の取得である。……(クロンロッド自身によると)この定義のすぐれている點は、第一に、労働におうじた分配との關連において、社會主義的發展段階における社會的所有の關係が指摘されている。第二に、社會主義的生產關係の肯定的特徴、すなわち、労働者……のみによる剰餘

生産物の取得がふくまれている。第三に、生産手段の所有についての平等の關係と、……生産手段の利用の成果についての事實上の不等の關係とのあいだの矛盾が反映されている」とした。クロンロードのこの提案は、スターリンの一九五二年論文における基本的經濟法則の規定が、かならずしも十分なものとはいかんがえられなくなり、また社會主義經濟にかなするいろいろな法則の體系的整理の必要がかんじられている現在、いさう注目にあたいたいするものとおもう。

* * *

ことしの一月から、ソヴェト經濟のあたらしい躍進をめざす七ヶ年計畫が着手された。この計畫と、それにづくあと一回の五ヶ年計畫の成功とによって、ソヴェト經濟が世界最高の一人あたり生産高の水準に到達したならば、それは巨大な努力のすばらしい結晶である。しかし一段と標準をたかめて判断するならば、それは社會主義の名にとってはとうぜんの屬性でもあろう。まさにこのような展望のもとに、ここに紹介した學會はひらかれたのであり、そこでは、農業にかなする問題におおきい比重がおかれ、不可分ファンドの性格、その他について、よいヒントをあたえられたが、他方、共產主義というカテゴリーのつかいかた、その他について、ものたらない點もあり、問題はなお將來にもちこまれてくる。

(1) K. Marx, *Kritik des Gothaer Programms*, Dietz, 1955, S. 22-5; (譯)「モータ綱領批判」『マルクス・エン

ゲルス選集』第二卷、二四一—四頁。

(2) “Экономические проблемы строительства коммунизма” *«Вопросы экономики»* No. 9, 1958, стр. 84.

(3) 『世界經濟年報』大月書店、一九五一年II號、二二二—一三八頁による。

(4) И. Сталин *«Экономические проблемы социализма в СССР»* 1952, стр. 17; スターリン『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』(飯田貞一譯)國民文庫、二三四頁。

(5) 『アジア經濟旬報』中國研究所、一九五九年一月上・中旬合併號、一六頁。

(6) 『Вопросы экономики』там же, стр. 90.

(7) 『Вопросы экономики』там же, стр. 91.

(8) Там же, стр. 114—5. (11) Там же, стр. 115.

(9) Там же, стр. 117.

(10) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, Dietz, 1953, S. 18; 『資本論』第一卷(長谷部譯)八六—七頁(向坂譯)三五頁。

(11) См. Сталин, там же, стр. 93—4; スターリン、前掲書、一一〇—一頁をみよ。

(12) 『Вопросы экономики』там же, стр. 91.

(13) Там же, стр. 96. (17) Там же, стр. 104.

(14) Там же. (9) Сталин, там же, стр. 37—41; スターリン、前掲書、四六一—五二頁。

(15) (一九五九・三・二四)(一橋大學大學院學生)